

# 末黒野

すぐろの



創刊七十五周年記念号

4月号

(通巻896号)

# 笹鳴

森清堯

山茶花の呵々と一叢大斜面  
人過ぎてがまんの噓つづけさま  
暮初めて富士の影濃き冬至かな  
沈みゆく眼下の蕘冬の霧  
急くほどに事はかどらず年の暮  
去年今年疫病の行方案じつつ  
ふくふくと上枝の雀初詣  
鳥声の湧きたる杜や淑気満ち  
お年玉ぺこりぺこりと辞儀二つ  
玻璃窓の外は木がらし稿数多  
笹鳴や堰越す水のささ濁り  
待つといふ辛抱ありて冬木の芽

瑞声

# 森の黙

黒滝志麻子  
(顧問)

山鳩の羽音に散りぬひめつばき  
あるだけの星散りばめて眠る山  
冬麗や肩やはらかな山並び  
引く波を押し上ぐる波浜千鳥  
おでん酒皿に五本の串並ぶ  
ひとひらの枯葉の舞ひぬ森の黙  
寒牡丹堂へ百歩の石畳  
買初や活字の大き季語辞典

# 甲矢集

配列は音順（月毎の循環）



## 竹百幹

石黒興兵

羽子板市売手の英語巧みなる  
咳込んで用無きバス停とび降りぬ  
義士会の香煙浴ぶる御練かな  
富士近く見えたる朝や寒に入る  
風音の竹百幹の寒さかな  
再生の力溜めゐる枯野かな  
国難をマスクに恃み年明くる  
一湾の動き初めたり初茜  
雲一朵をとどめ初富士きらめけり  
舞ふ巫女の淑気溢るる真面目顔

## 去年今年

岡野里子

冬夕焼山城の影浮き立たせ  
縁側や冬日と猫と新聞と  
数へ日や作務衣の僧の下駄の音  
去年今年濁世絶たたと雨戸閉ぢ  
携帯の動画の日の出初便  
シーサーの眼きらきら初明り  
聞き馴るる鴉声に瑞気大旦  
一羽二羽籬に弾む初雀  
元日の日差大らか鬼瓦  
諳んずるむすめふさほせ歌がるた

## 初 曆

菅野日出子

松籟や水尾見失ふかいつぶり  
綿虫やふはりと包む掌  
不夜城めく工場の灯や星冴ゆる  
夜回りに窓の内より会釈かな  
白き波寄する浜辺や干大根  
もうはかぬブーツいつまで卒寿越ゆ  
寒月を仰ぎて家路はるかなる  
恵方への道をスマホに尋ねけり  
鯛の身のはらりと崩れ蕪蒸  
まづ印す子等の誕生初曆

# 元旦

田中臥石

檀家寺妻の一打の除夜の鐘  
冬日射し来たり跋行の影躍る  
初日の出海を伸び来る波光る  
人名は符号読めなき賀状来る  
あらたまの年の一盞疫籠り  
将棋一番願ひ顔なる年賀客  
海の風唸り七種粥啜る  
初句座の鼎坐くづる茶菓の刻  
海鳴りをそびらに畦の芹を摘む  
芹洗ひ水袈裟斬りに小さく振り

# 記憶

森清信子

日の照らふ池に団居の真鴨かな  
師の墓へ記憶をたどり落葉道  
磨かるる原石のごと枯木星  
樹木葬の一樹を守り冬の鵲  
築山の松さつぱりと鴛鴦の池  
白にこそ真の華やぎ寒牡丹  
口重き女となりぬ着ぶくれて  
白菜のうねる葉脈土乾き  
つぶやきを詩へ昇華せむ初御空  
園越しに裾曳く富士の淑気かな

# 乙矢集

配列は音順、月毎の循環



## 第三楽章

岡田史女

一陽来復午後は衰ふ目の力  
白髪も齢も深む去年今年  
疫病去ぬことのみ願ふ元旦  
八十は第三楽章明の春  
正月を籠り一間に一人づつ  
読初の難解難読語の手引き  
人日や漆器収まる棚の上

## エデン

小田嶋野笛

無一物で生まれ八十路を着ぶくれて  
炬燵猫と妄想の旅エデンまで  
数へ日や雲吞逃す散蓮華  
落葉あれば落葉を蹴つて反抗期  
憎し懐かし京は故郷雪雜り  
羽蒲団の寝返り軽き不眠かな  
日溜りの猫落ち着かず冬の蚤

## 凍

星

加藤静江

神名備の竹垣の朽ち白障子  
ほつこりと朝日の包む返り花  
店裏や冬芽のしかと天を突く  
造成の半ばや百合の帰り花  
凍星の静寂を増せり杉木立  
級友の訃報届くや霜の朝  
光満ち静寂の深む年迎ふ

日向ぼこ

齊藤マキ子

賀 状

高木邦雄

師の遺句を声にしてをり日向ぼこ  
片減りの子の皮靴や年詰る  
空つ風肩ぶつけ合ふ下校の子  
悴かめる両手両足命惜し  
初氷捉へてをりぬ空の青  
トランペット吹くたび光る寒日和  
射しとほす樹間の初日鳥のこゑ

冬 桜

堺

昌子

途切れては続く魯田群れ鴉  
うすうすと里曲の日差し冬桜  
方寸の庄屋の柱冬ぬくし  
古民家の囲炉裏火匂ふ日和かな  
湯気あがる忍野湧水山眠る  
二百年経し木の振れ梅の花  
花浴びて昼餉を開く梅の園

大道芸

長尾タイ

枯葦や没日に染むる波の皺  
枯菊の衰れを誘ふ風の音  
着膨れて縄の電車に追ひ越さる  
三日はや信号無視の救急車  
芸果てて廻す帽子の凍ててをり  
初御空真白き富士を拝しけり  
大道芸話術も芸や小正月

去年今年

今村千年

冬 怒 濤

太田良一

幼子に手を引かれをり冬暖  
産土の風の匂ひや酢茎囁む  
波高き伊良湖岬や鷹一つ  
風風ぎて鶴の憩へる沼となる  
句を愛し人を愛して去年今年  
紛ひなき八十路の顔や初鏡  
初詣子らに三步のディスプレイ

恵 方 道

大川暉美

本殿の早寝の神や日短  
きりぎしの白き灯台冬怒濤  
城跡に残す寺院や冬景色  
本堂の賽銭箱や箕舞ひ  
耳鳴りの奥に足音雪女  
疎開地の訛聞きゆく旅始  
読初や途中で気づく読みし本  
初空や疎にして天網見当らず

あれこれと端折る齡や年用意  
声 太 き 漢 の 訛 飾 売

一山の除夜を揺さぶる法鼓かな  
寒き朝ケトルの音はメゾフォルテ  
裸木となるも古木の威風かな  
夫に付き法鼓間遠の恵方道  
神前の一言願ふ初詣



青炎集

森清

堯選



大網白里

鈴木礼子

横浜

是松三雄

冬至の日の明けの明星潤みけり  
中庭の縁先灯し実万両

ネットカフェ静寂の零す冬灯

朝の日に沖つ雲燃え地の凍てて

残り香のマフラー借りぬ神楽坂  
櫓撥ぬる音に澄みゆく心耳かな

湯浴へと羽織る綿入半衣かな  
枯菊を折れば命の香を放つ

仏蘭西山降り初買のフランスパン

門前の飯屋閑散年暮るる

森の神まこと鼻かもしれず  
独房の囚人のごと咳き込みて

横浜

根本公子

横浜

新倉ゆき江

有り合ひの色も愉しき毛糸編む  
糠星や悔いの重さを古日記

クレパスの色零すやう柿落葉

ミステリー文庫傍に去年今年  
丹沢のまとふ瑞雲大旦

冬月の影ばかり見る帰り道

三日はや納豆を掻く朝餉かな  
裾捌く足袋の白さの気品かな

湯気回す玻璃のマドラー生姜酒

ポインセチア病魔の潜む通り風  
初仕事先づは管理費納めけり

検温の関所を通り新年会

横浜

東小蘭美千代

横浜

芝田幸恵

藁団ひの日の温もりや寒牡丹  
マスクして眼鏡き男かな

しろがねの遠初富士や翳りなき

威勢良く捌く太腕黒鮪

紅を吹く一輪のみや冬薔薇

煤払疫病など寄せ付けぬぞと  
媼とて気持紅濃く初鏡

風花や九十年の一番

漆黒の富士肅然と寒夕焼

厚着して奮ひ立つものなかりけり  
深爪の痛みじんじん霜の夜

横浜

両角富貴

横浜

杉山弥生

大木を伐られて坂の道冴ゆる  
霜柱踏みてストレス発散す

川沿ひの淡き日透かし冬桜

遠景の海の蒼さや春を待つ  
七草粥祝ふ一人の笑顔かな

雪虫の不意に現はれ掌

待春や感染人数減らぬ日々  
裏山の知らぬ鳥語や春を待つ

リュック紐の肩にずしりと年用意  
玉砂利の落葉拾ひや禅の寺

臘梅や藁葺寺の要なる

横浜

滝沢いみ子

横浜

小倉純

冬帽子なんじやもんじやの大樹下  
論交はす過去のありけり雑煮膳

友よりの束の冬薔薇祝ぐ米寿

初電話一年会はぬ山の友  
松過ぎの海平らかや楽を聞き

千両や防鳥網を重ね掛  
晦日蕎麦打ちて絆のシニアたち

日記買ふ三十年ぶりの表紙選り

大寒の朝の筋トレ日本晴  
氏神の零時待つ人初詣

列のなき初詣巫女ただ一人

日溜りの繁みを揺らす笹子かな

# 耕 土 集

岡野 里子



絵双六大泣きの子の負戦

葉山 伊藤 美緒

寒暁の浦に点る灯残る月

凍て空の毛細血管大擧

御用邸の松の静寂月冴ゆる

齒科女医の頼もしき声春隣り

山眠る青き猫の目燃えてをり

横浜 梅津まり子

ふくふくと枝に 一列寒雀

寒椿暗きに紅のひと所

風花や眩しき光七色に

初釜や茶筌通しに光さし

賀状書くころ澄むまで墨をすり 横浜 平野 秀子

クリニックにひすがら洩るる聖歌かな

盆栽の松末広や年迎ふ

尺八と琴に吟ずる狗日かな

白寿の翁未だ頑張ると年賀状

会話なき登校の列冬の朝

川崎 木村 純子

開け放ち耐へる寒気や昼休み

仕出し食ふ仕事納や事務机

隣の子ママの陰より年の礼

寒鰯や回転の寿司取りそびれ

ひかる海はるかなる富士淑気満ち 横浜 西 計郎

鎮もれる葉山の海や去年今年

冬ざれの見渡す畝の模様かな

山間のこぼるるひかり冬の星

春待つやうねるひかりの熊野川

色変へぬ松の奥なる蔵屋敷

新潟 太田チエ子

出逢ふ人皆マスクして街の中

永らへていつもの暮らしねぎま汁

妙高山の風に縮まる干し大根

保存食出すや越後の冬ごもり

葉の上にみ仏のごと実千両 川崎 小林 廣志

ペンギンの宙を飛びたりお正月

元日の霊峰富士や神神し

葉牡丹や深淵めける渦の色

門ごとの冬木の影や散歩道

リモートに笑顔揃ふや年始酒 横浜 平田 きみ

減量や再び誓ふ年始

古本屋へ散歩始めの三日かな

松明やサーカス小屋の靡く旗

成人の日や駆け抜けて半世紀

柚子風呂や手足伸ばして生き延びて 横浜 久島しんの

煤逃げや古き手紙を読み耽る

添書の心に染みる年賀状

寒稽古赤き顔より若き湯気

年明けて変はらぬ町や違ふ今日

秋の空海の青さと張り合ひて 横浜 森 竹治郎

二十分待つなら歩く師走かな

旋風落葉溜りを賑はせて

回覧板回す百歩や雪の径

年用意ホース伸び切る玻璃の芥

一年の望み託すや初暦 横浜 喜田 君江

来し方の断捨離すませ老の春

丸髻の店主在りし日切山椒

潮の香の届く社や福詣

読み止しの本を臥せをり松の内

山眠る牧に人恋ふ親子牛 横浜 和田 啓

海光る荷台に余る泥大根

玩具屋とあれば足停む親子月

橋上は富士見ポイント初御空

息弾ませ交す挨拶初日の出

ト口箱に太き寒鰯能登の市 横浜 松川 昌義

月冴ゆる眠らぬ街の六本木

ぐじ焼くや若狭の海を識る夕べ

夜席の通りの芝浜年送る

炉の部屋に槍と鎧とや泣く赤子

冬晴のアンテナ眩しマンション街 横浜 秋山 文子

散策の靴音乾ぶ冬早

湯気の立つ洗濯物や冬日和

寒の入り湯舟に香るバスクリン

搾乳の掌に温りや寒の入り



落椿

荒井貞子

梅雨晴間気合ばかりで抄ら  
 山寺の雑念捨つる落葉道  
 白萩の明るき路地や風連  
 裸木の尖る枝先尖る風  
 初みくじ吉の凶のと夕の  
 母の忌の母の声かたと夕  
 泰然と愚痴なきくらし水  
 咲分けの地で際立てり落  
 榊の瘤の大き老幹うらけ  
 ひとりに居の柱の傷や子供  
 老鶯に応へ賑やかなる園  
 老の身を弁へてをり赤の  
 嫁に來て苦もある暮し秋  
 楽ありて妣を招く秋海  
 夕風や妣を招く秋海棠

秋簾

内田 梢

紅さして二月礼者となりけ  
 懇に筆洗ひをり水温しり  
 大きめの制服決めて新入生  
 父母眠る墓に卯の花腐し  
 テレワークし話し休みて汲  
 ひとしきり籠り話やビール  
 もすこしと秋の簾を惜しみ  
 虫の夜や句集幾度も読み返  
 洋館の庭に収まり曼珠沙  
 晩学の歳時記広げ敬老日  
 悔ゆる事の数多ありけり除  
 マスクして心のを隠しけり  
 寒雀今朝も來てをりり  
 元旦や下の一桁の当りり  
 鶏日の恙なき日や雀來る



羽拔鳥

佐藤喬風

御下がり悔いの亦おさがりや更衣  
 生涯の埋めつけしけり破れ傘穴  
 空堀を無き言葉交して夕涼み  
 たわい無縁側にくる羽抜鳥  
 また一羽縁に交する青大將  
 三ツ池の水面騒がし青座敷  
 扁額に読めぬ字のあり夏敷  
 秋の雷や北川の水青み  
 秋の雷や湖の深さや初音高き  
 新涼の影の深さや初盆会  
 戒名の彫りかそけし夜夜か  
 投函の音のそけし夜夜か  
 晩酌の一品添ふる良夜喰  
 種無しを種有る様に葡萄喰  
 ましらす酒酔ひて翁の寝言かな

卯の花曇

滋野 暁

春めくや背を上下さる疵の麻姑  
 青鰻や波郷を語り酒かた雪  
 淡墨の書線の滲みかす夕蛙  
 数独に消しゴムののしみかす夕蛙  
 結葉や句を拾ひたき山の道  
 憂き事は言はぬ卯の花曇かな  
 気をつけ隣の家の勢崩る暑さ  
 鬼百合や隣の家の勢崩る暑さ  
 読み終ふる八月号やおし止ま  
 冷凍のピザ焼き上がり暑のつ  
 読み止しの本にうがつ伏せ法師  
 秋澄むや師のやうに句を樂しま  
 枯草の刈らるる句ひ日の樂しま  
 侘助の一枝の似合ふかほ  
 鳴き声の一枝の似合ふかほ

走り蕎麦

山咲和雄

春うらら好きなきな銘酒の八海山  
 山葵田の景色となりぬ水の音  
 昨日掃き今朝掃き寄せて柿の花  
 我の句に妻の一言夕端居  
 句に迷ひ句に遊ばれてねぢれ  
 雨上がりひとききは高き蟬の  
 父の事何も分からず終戦日  
 トネルの跡のワイン庫ぶだう  
 鳥渡る期限切れたるパスポート  
 歩く事日課としたき秋日和  
 百歳の声もちらほら敬老日  
 八十の未来明らか踊る毛糸  
 編み棒の交差に踊る毛糸  
 診断は加齢と言はれ冬籠  
 炬燵寝や夢の途中の妻の顔

花筏

山口郁子

添へ木得て古木の息吹梅二輪  
 春光や社殿の欄間の彫の花  
 水光る鯉の案内の花筏  
 三味線草揺さぶる風に音出さ  
 気怠さを癒すすべなし梅雨籠  
 塵出す子の寝乱れ髪や夏休み  
 身支度や汗に化粧の整はず  
 にぎやかかに孫の先達墓参  
 虫の音のか細きソロや明け近  
 気楽には暮らせぬひとり秋の風  
 筋書きのなきショームせて今日の  
 短日の西日や富士を残しをり  
 日ざし抱き句やかなるや寒牡丹  
 狛犬の初日呑み込む阿吽か  
 初夢や誰れにも告げず温めたし

辛夷の空

池乗恵美子

固き夜のこつんと壊れ寒明くる  
 街病めど辛夷の空や子等の声  
 路地裏の花の二分咲き真砂女の忌  
 菜の花やひとりひとりの明日に夢  
 終息の見えぬ疫禍や花は葉に  
 雨に明け雨に暮れたり桜桃忌  
 松籟や一幅揺るる夏座敷  
 巻を追ふ奥の細道秋灯下敷  
 電氣柵に残る獣毛豊の秋  
 母と子の影を重ねて花野道  
 ひとり居の自問自答やそぞろ  
 残り香の母のぬくもり冬座敷  
 寄鍋やぐつぐつふつと本音も  
 口角を上ぐる寒紅久女のお元日  
 普段着に光るブローチお元日

蝶結び

岡美智子

二月来る郵便受けの細き窓  
 里の風いままだ尖りぬ梅一輪  
 のびやかなる辛夷の空となりけり  
 ひつそりと愛でる人なく雛納めり  
 城跡の垣の継ぎ目や草萌ゆる  
 蝶結びほどけて蝶の飛び立てり  
 励ましを交はす縁や聖五月  
 夏帽子被り膨らむ旅心  
 文月やあてもなく買ふ旅かば  
 菅笠の同行二人秋しぐれ  
 ジーンズの裾の折り目や牛膝  
 つり橋の空に泥付き道  
 大根の葉付き泥付き道  
 美しく老ゆるを願ふ今朝  
 鼠色の句帳の白紙年  
 新

日日に新たなり

沼崎千枝

周辺を見渡す限り春マスク  
 蛤よ早う砂吐け夕餉時  
 卒業子へ返事メールの絵文字入り  
 クロバーひときは光る四葉かな  
 花莫塵やテイクアウトのイタリアン  
 初きうり花殻つけてぶらぶら  
 一人おきの座席役者の所作涼し  
 子子の湧ける空き缶蹴る勇気  
 会へばすぐ病自慢や敬老日  
 月天心消防団の訓練日  
 羊腸の赤城の坂や薄紅葉  
 金色の熊手夜店の灯の真中  
 美容師は髭の貴公子冬うら  
 ラグビーや地元の子等のチアダンス  
 年玉や身丈越す子の照れ笑ひ

花蘇枋

東小蘭美千代

薄墨の山深深と春淡し  
 香箱を作る白猫雛の家  
 春日影二つの碁笥のふつくりと  
 風に舞ひ流れに遊び花筏  
 久遠寺や白州に触る紅枝垂  
 火の絶えて久しき生家花蘇枋  
 きはやかに杉の秀浮かぶ代田かな  
 桑の実や紫黒に染むる指と爪  
 軽鴨の子の浮きたつ八羽濤引きて  
 梓川の瀬音風音夏柳  
 藍色の深みゆく海秋隣  
 穂芒を手に佇めり蛇笏の忌  
 小春風並ぶ小舟の揺れもせで  
 囲碁を打つ音の弾けり白障子  
 自販機の明り際やか寒土用

雲の脚

宮澤靖子

ぶつかつてきつと足引く春炬燵  
 母の日に貫ふ造花の香気かな  
 白髪染止めてすつきり更衣  
 鎌倉や傾りに著莪の花群れて  
 御開きはビンゴゲームや花火の夜  
 一行書へ落款入れて夏終る  
 子規の忌や凹む机へ秋日影  
 遠ざかる軽トラ稲の香をこぼし  
 廃業の店は詰め所や秋祭  
 泥酔を演ずる下戸や村芝居  
 藻塩木のけぶる夜業や佐渡の小屋  
 高西風に雲の脚よむ漁師かな  
 かの杜氏とこの井戸ありて寒造  
 係留のマスタート林立春隣  
 藁の香の残る輪飾外しけり

一期一会の花巡り

池乗恵美子

母存れば卒業の朝や初桜  
 一枝垂れつめく風や紅糸垂桜  
 一陣の艶めく風や朝枝垂桜  
 うら若き桜の風朝枝垂桜  
 蒼天や一期一会の花巡り  
 夢語りのごとき現世桜満つ  
 坂の名に残る悲恋や花の冷え  
 蒼穹を晴れの舞台と嶺桜  
 江戸小紋の綾を織りなし花筏  
 咲いて花散つて花なり女坂  
 暮れ残る池面へ止まず飛花落花  
 桜散り星を残すや男坂  
 面影に添うて添はれて花月夜  
 帯解けば帯に吸はるる花疲  
 ひとひらとなりていまなほさくらかな

風

佐藤喬風

柔らかき風鐸の音秋の蝶  
山門を出でて素風につまづきぬ  
千羽鶴風に託せり原爆忌  
夕方の風の通ひ路乱れ萩  
大花野真一文字の風の道  
金風や根株に坐して握り飯  
下山者に道を譲られ風爽か  
鹿鳴いて森の暮色や風の音  
眼裏に風音残る野分かな  
行く秋や風紋続く九十九里